

# 聞名仏教

第 139 号 毎月発行  
(発行日) 2022 年 4 月 1 日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒 663-8113 西宮市甲子園  
口 2 丁目 7-20  
JR 甲子園口駅下車歩 4 分  
電話 (0798・63・4488)  
(発行人) 土井紀明  
<http://nenbutsuji.info/>  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp 郵便振替「東本願寺  
護持基金」00930-7-146886

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み  
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)  
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

## 死ねるから安心

佐々木蓮磨

この立場には「さびしさ」というものがなく、またアキラメ的な落ちつきを超えて積極的な前進感が生まれ、  
ております。

つまり他力信心の世界は親鸞聖人が、「長生不死の神方」といわれたように、永遠の生命を身につけるのでありますまいか。

その生命というものは、人間が認めるものでもなく、また理論的に確かめるといってもなく、我ならざる不思議な力がおのずからもり上がってくるというほかはないでしょう。親鸞聖人が「力なくして終わるときにかの土へはまいるべきなり」といわれた言葉が、まことに尊くいただかれます。

「力なくして終わる」というところに、自分のすべてが無くなるわけで、そこには毛のさきほどの自力もないはずですが、その自力絶無のところ、「かの土へはまいるべきなり」という力強い「べき」の世界が開けてくる、これこそ、他力信心の真面目ではないでしょうか。

すべて人間というものは、何を求めているのでしょうか、これは人々によっていろいろの見方があり、また考え方があろうと思えますが、そのすべてに通じているものは、「安心したい」ということにおさまるのではないのでしょうか。子供をもつ親にしても、金をためている人にしても、地位を求めているインテリにしましても、最後は、「どうかして生活の安心が得たい」という念願をもっていることだけは間違いがないと思います。しかし、人間は、そうしたことによって、果たして安心ができるでしょうか。〈おそらく一時的な気休め〉か、さもなければ〈捨てバチ〉的のアキラメではないかと思えます。

かつて西田天香氏が、ある講演の中で、「人間は何事についても、さほど心配することはない。一番困ったときは死ねるから安心だ」と言われたことを記憶しておりますが、これは一見、突飛な言葉のように聞こえますが、考えてみると、なかなか味わいの深いことばのように思えます。

すべて人間の不安というもの、最後は「死んで困る」というところにあるようです。しかし、その不安、または心配というものは、いかにしても解消することのできるものではありません。そうなる人間というもの、は、不可能なことを願求めて、いつまでも苦しみの世界を引きずり回されているようなものです。これが流転とか、輪廻とか言われる根本的な意味ではないでしょうか。

西田天香氏が「死ねるかから安心」と言われたことば

# 現代真宗問答

## 4

(前号からの続きです)

A 「前号で、アミダ仏は私(自我)の分別(はからい)では掴めないこと。アミダ

仏は私と向き合えないし掴めないと申しましたが、まずアミダ仏とは光明無量・寿命無量のはたらきであることを確認しておきます」

B 「アミダ仏と向き合えない、そういう〈私〉とは」

A 「私とは〈自我の私〉いわゆる日常意識している私のことであり、その私は身体を私に属するもの、いわゆる〈私の身体〉と違って生活している私、そういう私です」

B 「アミダ仏と私の基本的な関係は？」

A 「まず私のいのち(有量)は寿命無量を離れてはあり得ません。有量は無量の中の一部とっていいでしょう。ですからアミダ仏という寿命無量は私のいのちの

根源であり、根拠であるといえましょう。大海をアミ

ダ仏のいのちに喩え、波や泡を私のいのちに喩えますと、波や泡にとつて広大な海水は根源であるというよなものです。しかし、人はこのアミダのいのちの中にありながら、それを見失った状態になっています。そしてこの寿命無量のいのちにあうことが救いであるといえましょう。でもこの自我である〈私〉の側から、寿命無量のアミダ仏にであうとすることは不可能であるとも申しました」

B 「ではどこでそのアミダ仏にあうのかということが問題です」

A 「このことに関して今回も偉大な哲学者の西田幾多郎博士の言葉を引用させていただきます」

『斯く自己が自己の根源に徹することが、宗教的入信である、廻心である。』

而してそれは対象論理的に考へられた対象的自己の立場からは不可能であつて、絶対者そのものの自己限定として神の力と云はざるを得ない。信仰は恩寵である。

我々の自己の根源に、かかる神の呼聲があるのである。』

(旧西田幾多郎全集十一巻四二三頁)

B 「〈自己が自己の根源に徹する〉ことが、宗教的入信である」といわれています。これをどう理解したらいいのでしょうか」

A 「私たちのいのちの根源であるアミダのいのちにあうこと、それが入信であり、救いだということですよ」

B 「西田博士は〈それは対象論理的に考へられた対象的自己の立場からは不可能である〉といわれていますが、どういう意味ですか」

A 「対象的自己の立場というのは、自我である私の立場から対象的にアミダ仏を考へて掴もうとする立場で

す。いわば我の外に、対象的にアミダ仏を置く立場です。このような私の側から思ったり考えたり、捉えようとする計らいによってアミダ仏にふれることは不可能であるといわれるのです。このことについても前号で申しました。要するに自我の立場はどこまでも私が主体でアミダ仏は客体になっています。有限な者(私)が無限なアミダ仏をつかむことはできません」

B 「私の側からアミダ仏を知ろうとしても駄目なら、どうしたらあえるのですか」

A 「この処で親鸞聖人の教をよく聞くことが大事なのです。親鸞聖人は法然聖人やその他の高僧方の導きによつて、〈私がアミダ仏を〉という方向ではなく、〈アミダ仏が私に〉という方向に救いがあることを仏説無量寿経の経説によつて聞き開かれました。ここが非常に大事なところですよ」

B 「私がアミダ仏を求めるという方向と、アミダ仏が私を求めて下さったという方向は、全く逆ですね」

A 「そうですね。これは大きな転換です。これを〈他力回向〉の法といいます。アミダ仏は、私たちの力ではアミダ仏にあえないこと、

それゆえに私たちは苦しみの境界に長々と流転を重ねていることを憐れみたまいて、アミダ仏の方から私にあいに来て下さったのです。そういう有難いはたらきは一切衆生にすではたらいて下さったのが仏説無量寿経なのです」

B 「ではアミダ仏はどのようにして私たちにはたらきかけて下さっているのでしょうか」

A 「アミダ仏はさまざまなかでもって私たちにはたらきかけて下さっていますが、一番具体的且つ要のほたらきは、南無阿弥陀仏という言葉となつて私たちにはたらきかけてご自身を知らせて下さっているということですよ。私の方からアミダ仏にあうことは不可能なので、アミダ仏が南無阿弥陀仏の言葉として私にあいに来て下さったのです。そのこと

を西田博士は、

『絶対者そのものの自己限定として神の力と云はざるを得ない。信仰は恩寵である。我々の自己の根源に、かかる神の呼聲があるのである』

といわれているのです」

B 「〈絶対者の自己限定〉とは」

A 「絶対者とは絶対無限者すなわちアミダ仏のことです。無量無辺のアミダ仏は南無阿弥陀仏という一句の言葉にご自身を表現された、つまり自己限定されたということです」

B 「へ我々の自己の根源に、かかる神の呼聲がある」とは」

A 「私たちのいのちの根源であるアミダ仏が南無阿弥陀仏となつて私たちに喚びかけたもうのです。神という言葉は宗教学では絶対無限者のことを意味します。アミダ仏のことです。アミダ仏は本来、色も無く形もましまさぬ無限な清浄真実のはたらきそのものです」

B 「では〈神の呼聲がある〉その呼聲とは」

A 「色も無く形もましまさぬアミダ仏が仏名である南

無阿弥陀仏という言葉となつて私たちに常に喚びかけておられるのです。その喚び声が私に届いて口割つて南無阿弥陀仏と称名念仏として現れ出て私たちに聞かせて下さっています」

B 「どうして名となつて喚びかけられるのでしょうか」

A 「アミダ仏は西田博士が〈対象論理的に考へられた対象的自己の立場からは不可能である〉といわれたように、私の外にアミダ仏をおいて、アミダ仏にあおうとすることは不可能だからです」

B 「なぜ对象的にアミダ仏を捉えることが出来ないのですか」

A 「アミダ仏は私に余りにも近くましますからです。アミダ仏と私とは本来一体だからです。余りにも近いものを対象化してとらえることはできません。もし捉えたとするそれはアミダ仏の概念であり影であり幻想です。しかも对象的に自我で捉えたアミダ仏は自我を固めるものになったり、自我に利用されて、ますます自我が膨張して迷いを深

めてしまいます。ですからアミダ仏は自我につかませません」

B 「自我に利用されるとは」

A 「アミダ仏に対して〈どうか病気を治して下さい〉とか〈経済的に豊かにして下さい〉とか〈災難不幸が来ませんように〉というように私の願望を仏にきかせようとするのです。ですからアミダ仏は自我には捉まされたまわらないのです。掴んだ仏はその人の思い込みの仏に過ぎません」

B 「わかりました。真のアミダ仏は知る私と一体にましますから、アミダ仏を対象化して知ることはできないのですね」

A 「ええ、アミダ仏は対象的に見ることはできません。ところが有難いことに、私と共に一体的にましますアミダ仏の側から南無阿弥陀仏の音声（音声仏）となつて喚びかけて下さるのです。アミダ仏は見えなくてもアミダ仏の喚び声（名号）を聞くことによつてアミダ仏が私と共にましますことを知らされるのです」

B 「姿は見えねども声で存在を知るのですね」

A 「ええ、例えば夕暮れになると人が向こうに立っていても暗くて誰か分かりませんが、その時にむこうの人が〈私は山本です〉と声を出して名のつて下されば、相手が見えなくても、山本さんの存在を知ることが出来ます。そのように目には見えなくても、アミダ仏が声で名のられたらアミダ仏の存在を知ることが出来ます」

B 「名という字は夕べの口と書いて、夕べになつて暗くなる」と口で名のすることによつて相手に知らずという名の語源の意味を聞いたことがありません。それなのですね」

A 「ええそうです。しかもアミダ仏は遠いところから喚ばれるのではなくて、私と一体にして私のいのちの根源から喚びたもうのです。ここを西田博士は〈我々の自己の根源に、かかる神の呼聲がある〉と言われているのです」

B 「アミダ仏の御名を称えるのですが、他の仏の名で

はダメなのですか。例えば釈迦牟尼仏の名とか薬師如来の名とか弥勒仏などの仏名を称えるのではダメなのでしょうか」

A 「ダメというか、アミダ仏の名は単なる仏名ではなくて、本願の名号といつてアミダ仏の誓願が掛けられている名です」

B 「誓願とは」

A 「佛説無量寿経に説かれている念佛往生の願です。〈我が名を称えるばかりで助ける〉〈そのままなりを引き受ける〉という大悲の誓いです。そういう誓願がかかつている名です」

B 「南無阿弥陀仏には〈汝を助ける〉という救済力が掛かつている名なのですね」

A 「ええそうです。ですからアミダ仏が南無阿弥陀仏と名のつて下さるお念仏を聞くということは、〈ああ、アミダ仏はこのままなりで引き受けて下さっている、抱いて下さっている〉と知らされるのです。そこにアミダ仏の攝取不捨の利益に預かるのです」(了)

# 信心夜話

落ちると見込んで下されたのも仏様なら、その者を助けると成就して下さったのも仏様なり、南無阿弥陀仏なり。箸持つ世話もいらぬ。口にねじこんでもろうていながら、いるのに吐き出す。とも角にも今の我が身の仕合せを仰ぐばかり。

〔『松並松五郎念仏語録』より〕

\* \* \*

自分を「落ちる身」と知るということは単なる自己反省では出来ないのです。どうしても自分をどこかで肯定しないと凡夫は生きられない。たとえ一時的に自分の罪悪の深さを感じたとしても、すぐに元の「自分は善い人間だ」という処で生きようと思つて。たとえ信心をいただいたと思つても、「自分は罪深い人間だ」という認識はなかなか身につかないし、そう思つても

るから落ちるしかない、そういう者を「助ける」と喚びかけたもう仏様、それが南無阿弥陀仏。

すぐに元に戻つてしまう。どこまでも自分は間違つていない、自分は悪くない、自分は善人だという意識を離れることが出来ない。それほど宿業が深いと言えましょう。そういう私に、信心があるが無かるうが南無阿弥陀仏様は「汝、罪深き者よ」とお知らせ下さるのです。その都度お知らせ下さるのです。

南無阿弥陀仏は「助からぬ者を助ける」の仰せ。助ける対象は「助からぬ者」であり「地獄へ落ちるような存在」である私たちです。

南無阿弥陀仏様が教えて下さる私のすがたこそ私の真の姿。自我で思っている（善人の私）は私の傲慢な思い込みです。本当に罪が深いからいつでも自己肯定に傾くのです。

南無阿弥陀仏は、我執我愛の塊である罪の自己を知らしめ、我執我愛の塊であ

【住職雑感】  
3月に入り急に暖かくなってきました。この冬の寒さは極寒がゆるまず、やっと春の暖かい陽光をあびて身が軽く感じられます。コロナは依然として減りませんが、ウイズコロナで、過度に不安がっても前に進めません。といって油断は大敵です。

コロナのパンデミックで辟易している世界で、ウクライナでのロシアの侵攻は世界を驚かせました。第二次世界大戦後は強国が弱小国に攻めていって領土を奪うという戦争はなくなって、あとは国内の紛争どまりだと思つていましたが、今回、以前のような侵略戦争が起こったこの事件は世界史に刻まれる重大事件であると思えます。これをきっかけに各国が軍備を増強するばかりでなく、核兵器を持つて防衛しようという要望が大きくなり、世界はさらに危険な状況になりかねません。一国の指導者がどういふ世界観や人生観をもつかということが世界の平和に非常に大きな影響を与えると、いうことを痛感します。領土拡大主義、武力に依る制圧の肯定、一人一人の人間のいのちの軽視などが指導者の世界観・人生観

に内包されていると戦争や弾圧の行動に表れてきます。独裁的な国家は、武力を独占的に持ち、表現や情報を厳しく規制し、公正な自由選挙をさせないことによつて政権を維持しようとするから、独裁国家は長く続きません。ただこういう指導者層を生み出してきたその背景にその国の民衆の考えや思想の土壤があると思えます。土壌が汚れていると毒花が咲きます。その国民がどういふ人生観や世界観をもつているかで、その国にどういふ指導者が出て来るかに深い関係があると思えます。いかに独裁者が独裁的権力を持つていても、それを支持する人々がいないなら、権力を維持し得ないでしょう。そのためには、人間の自由はどこにあり、人のいのちはどこで尊重され、そして人間の欲望がどこで制御されるのかを学んで、正しい認識なり精神が民衆の中に定着することが大事だと思えます。それには真理教育が必要で、正しい教育は国家や世界の平和の基礎であると思えます。それを思ひますと、仏教の教えが人々に浸透するところが願われてなりません。

（了）